



中央ウェイ

10月号



「1年前！」

主幹教諭 竹見 昌久

少し先の話しになりますが、デフリンピック開催まで11月15日（金）で「1年前」となりました。デフリンピックの招致活動のときから、「本当に日本で開催するのかな」とぼんやりと見ていたことが気付けば「1年前」という数字となり、いよいよ現実事として捉えられるようになりました。500日前イベントは、葛飾ろう学校の児童生徒で「500」の人文字を作って、SNSで広く拡散されました。今後、本校でもこのような機運醸成イベントは協力をしていきたいと考えています。

デフリンピックでは、“デフ（聴覚障害）スポーツの魅力如何に世の中に広く伝えていくか”という命題があります。突然ですが皆さんは、「デフスポーツの魅力は？」という問いにどのように答えますか？簡単なようで、難しいこの質問ですが、私は「デフスポーツは見た目ではわからないこそその魅力がある」と答えます。見た目という表現が正しいかわかりませんが、デフスポーツにはスポーツの奥深さが隠されていると考えています。

話が少し離れますが、私が開発、普及活動を担当している「スタートランプ」ですが、普及活動を始めたばかりの10年前の話です。とある県の一般大会に参加するデフアスリートのスタートランプ支援をするために競技場で審判の打ち合わせ時に、私からスタートランプの使用について説明をし終え、競技場でスタートランプを設置している時に一人の審判員の方が私に話しかけてきました。「私が知っている聴覚障害者の選手は、こんな装置に頼らないでもスタートできていましたよ」「こんなランプ必要ないでしょ」と伝えてきました。その話しを受けて説明をしましたが、理解は得られず悔しい思いをしたことを今でも覚えていますし、正直、今でも同じようなことを言われることはあります。

それは聴覚障害者について理解が進んでいない、または知識が浅い方が大半で、スポーツの世界に限らず、世の中の聴覚障害者への理解はまだまだ進んでいないことを表していると考えます。この状況でデフスポーツの魅力語るなど到底できないことですし、伝えたところで意味のないことなのではないかと考えてしまいます。つまり、「魅力の伝えにくさ＝聴覚障害への理解不足」なのではないかと感じています。

スポーツを行う上で“音”を使う場面は、どのくらいあるか考えたことはあるでしょうか？例を出しますと、「ホイッスル、コーチの指示、打球音、足音の強さ、相手の息遣い、危険を知らせる音声」など、すべてがスポーツを行う上で大切なもので、スポーツと音は絶対に切り離せないものとなっています。特に競技力が高まるほど、国際大会などは厳正なるジャッジを必要とされ、なおさら音に頼った競技運営が必要になります。私はこれをスポーツの“音の壁”と呼んでいます。デフアスリートはそうした見た目では見えないハンディーキャップを背負いながら競技を行なっているのです。見た目からは判断されにくい聞こえないハンディーキャップの中で行うスポーツがいかに大変なことで、それを乗り越えてチャレンジするアスリートがいかに偉大であるか。聴覚障害への理解が深まれば、デフスポーツの魅力は必然的に伝わっていくはずで。

デフリンピックではこうした、聴覚障害の課題を世の中に伝えていくことが大きなテーマだと考えます。皆さんもぜひ、デフリンピックの魅力を考えてみてください。

